

[032]九州大学生体防御医学研究所年報 : 2017年

<https://hdl.handle.net/2324/2195867>

出版情報 : 九州大学生体防御医学研究所年報. 32, pp.1-, 2018. Medical Institute of Bioregulation, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

平成29年度（2017.4～2018.3）の研究活動の概況
生体防御医学研究所・所長
中別府 雄作
（なかべつぷ ゆうさく）

生体防御医学研究所は生体の恒常性を維持するために重要な「生体防御」を研究テーマに据え、生命現象の本質に迫る基礎研究を展開するとともに、生体防御機構の破綻による疾患の発症機序の解明と診断、治療法の確立を目指した研究を展開しています。

本研究所は、昭和57年（1982）年4月に九州大学温泉治療学研究所（大分県別府市）と医学部附属癌研究施設（病院地区）の統合、改組により発足しました。平成13（2001）年4月には、遺伝情報実験施設を統合して大幅な再編を行い、3大部門（ゲノム機能制御学部門、細胞機能制御学部門、個体機能制御学部門）、2附属研究センター（遺伝情報実験センター、感染防御研究センター）の構成となりました。その後、平成21（2009）年4月に感染ネットワーク研究センターを設置し、平成22（2010）年4月に感染防御研究センターを生体多階層システム研究センターに改組しました。平成23（2011）年4月には別府地区の病院と臨床3分野を九州大学病院へ移管し、より一層先端研究に集中する体制を整えました。平成25（2013）年4月には、「遺伝情報実験センター」の改組により「トランスオミクス医学研究センター」を設置し、多階層のオミクス技術を用いた医学研究の世界拠点を目指しています。平成29（2017）年6月1日には、「ゲノム機能制御学部門」を「分子機能制御学部門」に名称変更し、生体分子の機能や構造の基礎研究を展開しています。

本研究所は、平成22（2010）年度に文部科学省から共同利用・共同研究拠点「多階層生体防御システム研究拠点」として認定され、生体防御に関連する研究を行っている国内外の多くの研究者と共同研究を推進してきました。平成28（2016）年4月からは、第2期の共同利用・共同研究拠点「多階層生体防御システム研究拠点」の認定更新を受け、トランスオミクス医学研究センターをコアに国内の3つの共同利用・共同研究拠点（東京医科歯科大学難治疾患研究所「難治疾患共同研究拠点」、徳島大学先端酵素学研究所「酵素学研究拠点」、熊本大学発生医学研究所「発生医学の共同研究拠点」）と協力して「トランスオミクス医学研究拠点ネットワーク形成事業」を展開しています。平成29（2017）年度の主な活動状況は以下の通りです。

1. 平成29年7月には松本 雅記 准教授（プロテオミクス分野）が「定量プロテオミクス技術の開発と応用に関する研究」の業績で平成29年度日本プロテオーム学会賞を受賞した。
2. 平成29年4月1日付で大阪大学より馬場 義裕博士がゲノム機能制御学部門 免疫ゲノム生物学分野教授（発生工学実験室長兼務）として着任した。
3. 先端的な研究を積極的に推進し、発表した学術論文の合計は157報に上った（客員教授含む）。そのうち、インパクトファクターが10を越える科学雑誌に掲載された論文は2報あった。Nat. Commun. 誌1報（分子医科学分野 [中山 敬一 教授]）、Cell Stem Cell 誌1報（器官発生再生学分野 [鈴木 淳史 教授]）。
4. 第27回ホットスプリングハーバー国際シンポジウム（平成29年度九州大学生体防御医学研究所国際シンポジウム）「Frontiers in Stem Cell Research and Reprogramming」を開催し、Ludovic Vallier (University of Cambridge, UK)博士

ら5名の著名な海外演者を招いて、活発な討議を行なった(平成29年10月31、11月1日、コラボ・ステーション I)。参加者は226名であった。

5. 共同利用・共同研究拠点として認定されている生命系国立大学附置研究所(10拠点)が連合して毎年開催している研究所ネットワーク国際シンポジウムの第12回シンポジウム「医科学の新発見がもたらす医療のパラダイムシフト」(東京大学 医科学研究所主催)「Driving Next-Generation Medicine: the Spirit of Pioneering Discovery in Medical Science」に教員や大学院生が参加し、発表や討議を行なった(平成29年11月28、29日、東京大学 医科学研究所)。大学院生2名が優秀ポスター賞を受賞した。
6. トランスオミクス医学研究拠点ネットワーク形成事業の第2回国際シンポジウム「KEY Forum 2018 Stem Cell Traits and Developmental Systems」(熊本大学発生医学研究所 共同利用・共同研究拠点「発生医学の共同研究拠点」・トランスオミクス医学研究拠点ネットワーク形成事業主催)に参加し、発表や討議を行なった(平成30年1月11、12日、熊本市国際交流会館)。
7. 平成30年1月12日にトランスオミクス医学研究拠点ネットワーク形成事業の第3回ネットワーク形成推進会議を熊本市国際交流会館で開催し、各拠点間の交流や次年度の国際シンポジウムの開催について打ち合わせを行った。
8. 共同利用・共同研究拠点「多階層生体防御システム研究拠点」(平成28年度から6年間)として公募により4件の国際公募を含む57件の共同研究、2件の研究集会を採択し、それぞれ実施・支援した。
9. 研究所全体の交流の場として、平成29年5月10日に親睦会(コラボ・ステーション II)(173名参加)を行い、同年7月19、20日に第20回生医研リトリートを開催した(ホテルセキア、熊本県南関町)(150名参加)。リトリートの口演はすべて英語で行われ、最優秀口演賞1題と優秀口演賞1題、最優秀ポスター賞1題と優秀ポスター賞2題を選出し、表彰した。
10. 国内外から第一線の研究者を招聘して合計29回の生医研(多階層生体防御システム研究拠点)セミナーを開催し、活発な討論を行なった。なお、そのうち15件は英語で講演・討議が行われた。
11. 平成29年10月30日に、第2回4部局(医学研究院・歯学研究院・薬学研究院・生体防御医学研究所)合同男女共同参画FDを企画・開催した。第一部は東北大学教授 大隅 典子 先生 による講演「無意識のバイアスからの開放:ダイバーシティのススメ」、第二部は公開討論会(各部局から2名、九州大学男女共同参画推進室1名、計9名)を行った(参加者191名)。

国立大学法人の附置研究所においては、最先端かつ独自性の高い最新の基礎研究成果の情報を発信することはもちろん、社会貢献・国際貢献の活動を社会に対して目に見える形で公開し、自らアカウンタビリティを全うすることが求められています。これらの課題に適切に対応するため、今後とも生体防御医学研究所教員・学生・スタッフ一同、より一層の努力を行う所存です。今後とも、ご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

平成30年4月1日